

雪かき男

この街には「雪かき男」と呼ばれる男がいる。雪が降ると駅前に現れ、ロータリーから真っ直ぐに延びる歩道の雪かきをすることから、そう呼ばれている。

雪かき男は、作業用防寒着を上下に着込み、雪が積もり始めると、アルミ製の角スコップと使いこまれた竹箒を肩に担いで駅前に歩いてやってくる。雪かき男は、誰と話すこともなく、ただ黙々とスコップで雪かきをする。仕上げには雪かきした路面を竹箒できれいに掃いていく。それが終われば、また、雪かき男はスコップと竹箒を担ぎ、駅前から歩いてどこかに帰って行く。

雪かき男の素性はよく知られていない。フードをかぶりマスクをした雪かき男の素顔を見た人もいなければ、声すら聞かずにどこかに帰って行く。

「すみません。雪かきをしている人を記事に取り上げてほしいのですが……」

突然、支局の入口の受付に白髪の男が現れた。和泉は立ち上がり、受付のカウンターに向かった。半年前に総務の契約社員の子が退職してから、来客対応は知らない間に女性である和泉がすることになっていた。

「失礼ですが、お約束はありますか？」

男は和泉の顔を真っ直ぐに見つめたまま、黙って首を横に振った。

礼服のような黒い背広を着たその男は、受付に入ってくる前に脱いだコートを腕に抱えていた。時々いる記事のクレームをつけにやってくる人とは明らかに違っていた。

「どこで雪かきをしている人のことですか？」

「皆さんから雪かき男と呼ばれている人のことです」

男は仕事をしている局員全体に向かって聞こえるように言った。

「あの人は二十年もの間、たった一人で雪をよけてきたのです」

男の通る声がフロアーに響いた。

「失礼しました。どなたか担当とお話をされている件でしょうか？」

男の声に驚いた和泉が改めて内容を確認しようとする

青木ガリアン

ら聞いた人もいないと言われている。それでも、雪かき男のことは街の誰もが知っているのだ。

吉竹和泉も雪かき男のことは知っていた。新聞社に女性記者として新卒で就職し、雪国の地方都市に赴任して五年、その駅を最寄りに支局まで電車通勤する和泉は、毎年雪かき男を見かけていた。

夜半からの冷え込みで、十二月としては二十年ぶりのまとまった雪となったその日も、和泉は雪かき男の脇を通過して出勤してきた。

雪国とはいえ、その年初めての雪で交通機関にも遅れが出て、新聞社としては朝から対応に追われた。しかし、降り続いた雪もやむと、やがていつもの支局に戻り始めていた。

と、その様子を見て、村上デスクが席を立ち受付に向かっていた。

「吉竹、小会議室にコーヒーを三つ頼む」

デスクはそう言うと、男を小会議室に案内していった。

和泉はサーバーからコーヒーをカップに注ぎ、二人の後を急いで追った。隣の席の後輩の山村和樹がマスクの裏で、「いよいよ御茶くみですか」と笑っているように見えた。山村は新卒二年目だが、警察回りや高校野球、選挙の取材もそつなくこなし、コロナ対応などすでに支局の戦力になっていた。

会議室のドアを開けると、デスクと男の人はお互いに名刺交換をしていた。

「吉竹、おまえも名刺を」

デスクから言われ、和泉もコーヒーをテーブルに置いて名刺交換をした。男の人は伊部昭雄という名で、全国に支社をもつ運送会社の安全課課長の肩書だった。

和泉は、伊部という男と村上デスクの前にコーヒーを出したが、コーヒーはもう一つあった。誰のものかわからないでいると、デスクが横に座れと手で合図した。和泉は意味がわからないまま、伊部の名刺をテーブルの前に置き椅子に座った。

「お忙しいところ、申し訳ありません。どうしてもあの人のことを新聞で取り上げてほしかったので、突然、押しか

けてしまいました」

伊部は、そのみことな白髪の頭を深く下げた。

「いえ、雪かき男のことは、以前から感謝の声や記事にしてほしいという投書が寄せられていたのですが、雪の季節は年末年始と年度末もあり、長い間対応ができずにいました。こちらこそ申し訳ありません」

村上デスクも頭を下げていた。和泉はそんな投書が来ていることを全く知らなかった。

「そうでしたか」

伊部は、説明が省けたと安心した表情でコーヒーに口をつけてから話を続けた。

「私は以前こちらの営業所にいたのですが、この二十年は、年に一回来させていただいているだけで、彼が雪かきをしていることを知りませんでした。さきほど、偶然、あの人を見かけ、商店街や交番の人から、彼が二十年もの間ずっと、たった一人で雪かきをしてきたことを聞かされました」

「こちらにお越しの用件はもうお済みなのですか？」

村上デスクは、伊部がコート以外、鞆すら持っていないのを見ながら聞いた。

「はい、これからすぐ関東に戻ります。運送会社は年末年始が繁忙期ですので」

「安全課の課長さんでいらっしゃるのですね」

伊部はドアの前でそう言うと、受付のカウンター越しにフロアで働いている人全体に頭を下げ去って行った。

会議室を片づけて席に戻ると、村上デスクが資料の入ったクリアファイルと和泉の目の前に置いた。

「雪かき男の名前は高田大樹さん。一人もので、雪の期間以外は期間工として工場に働いている。情報はその程度。」

あとは、寄せられた投書だ。皆、感謝の言葉が綴られている。彼はもう二十年もボランティアで雪かきをしている。どんな思いで何を考え続けているのかを紹介してほしい。締め切りは雪どけまででかまわない」

取材記者で入社したのに、満足に記事も書けず、総務のような仕事ばかりしている和泉がデスクには暇そうに見えるたのかもしれない。

「あれって、ボランティアだったんですか？ しかも二十年もやっているんですか？」

和泉は、行政が鉄道会社に雇われているか、請負で契約している人だと思っていた。それも二十年も続けているとは知らなかった。

「そうだよ、地味かもしれないが、スーパージョランティアド。アプローチによっては反響があるかもしれないぞ」

「でも、ただ雪かきをしている人ですよ」

「そこにどんな物語があるかわからないから取材するのだろうか。多くの人が、記事にしてほしいというのには必ず理

「ええ、私ができる役職ではないですし、そんな資格もありませんが、被害者、そのご家族、そして加害者のその後の長い人生を変えてしまう交通事故を防ぐことだけが私の使命と考え仕事をしてきました」

伊部は仕事のことを聞かれると、背筋を伸ばし、テーブルに身を乗り出すように話した。

「それで、雪かき男と呼ばれる人のことを記事に取り上げていただけるのでしょうか？」

「ご要望は承りました」

村上デスクは和泉の顔を横に見て答えた。

「取材は、この吉竹が担当します。雪かき男の駅から電車通勤しています。もう五年も彼が雪かきをするのを見てきています。時間はかかるかもしれませんが、きつと期待に沿う記事を書くと思います。では、進捗がありましたら、こちらから連絡させていただきます」

「よろしく願いいたします。本日はお忙しい中ありがとうございます」

二人はすでに立ち上がっていた。デスクの話を驚きのあまり呆然と聞いていた和泉も慌てて席を立ち、帰ろうとする伊部の前に出て、会議室のドアを開けた。

「吉竹さん、私は彼が二十年してきたことをこの新聞記事で皆さんに知ってほしいのです。どうかよろしく願います」

由がある。それを探って、自分の言葉で記事を書いてみる」

デスクはそう言うと、朝刊の締め切りに向けて忙しいように机のパソコンの画面に戻って行った。デスクから渡されたファイルには、何通かの手紙とネットの書き込みのコピーが入っていた。

手紙は、老人や子をもつ親、障がいのある人から寄せられたものが多かった。皆一様に雪かき男に感謝していた。車道は機械で除雪されるが、歩道は対応が遅くなる。除雪車が歩道に雪を寄せていくこともある。それでも、駅前には雪かき男がいつもきれいにしてくれ、歩きやすくしてくれ。一日や一回のことではなく、もう二十年近く、朝でも夜でも休みなく雪かきをしてくれる。市民のために黙々と汗を流している人がいることを是非記事として伝えてほしいというのが共通している内容だった。

ネットの書き込みのコピーも添付されていた。男が雪かきしている写真と短い感謝のコメントのようなものが多く、中には通行の邪魔だとか不気味だと揶揄するものやあそこまできれいに掃く必要があるのかと批判めいた声もあったが、おおむね手紙と同様、雪かき男への感謝と気遣いの言葉が多かった。雪かき男が人と話しているところを全く見たことがないので、実は現代の雪男が幽霊なのではないかという都市伝説的な書きこみも中にはあった。

「たいへんそうですが、楽しそうじゃないですか？」

後輩の山村が資料を覗き込みながら言った。

「それって皮肉？」

「皮肉じゃないですよ。話をしてもらえない人の取材はたいへんだと思って……。じゃあ、これから飲食店の感染症対策の取材をして、そのまま帰ります」

山村は机の上にあったノートパソコンや書類を鞆に入ると、ホワイトボードに直帰のマグネットを貼り、夜の街の取材に出かけて行った。和泉は雪かき男がスコップを雪に差し込んでいる写真を見ながら、皮肉っぽくなっている女性の先輩として、またどこかで酒の肴になるのだろうかと思っていた。

フロアーにある大きなモニターには、低気圧の通過で大雪の可能性はなくなったが、場所によっては夜半から早朝にかけて雪が積もるところもあると予報が流れていた。

雪の予報は、この街では「雪かき男」に遭遇できる予報でもあった。

*

厚手のカーテンを開けると、明け方から降り積もった雪で、あたりは一面真っ白な世界となっていた。

和泉は就職するまで雪国に住んだことがなかった。冬になると、目の前の景色は一変し、すべてが白い色で塗りつ

見つめていた。

「なぜ、雪かきをしているのかを聞かせていただきたいのですが」

和泉が聞いても、男は和泉を見つめるだけで答えることはなかった。

「歩行者が安全に歩けるようになりますか？」

和泉は食いが下がるように聞いたが、雪かき男は返事をすることなく、また竹箒で路面を掃き始めた。そこには取りつく島もなかった。

交差点の雪だまりに、前日の朝にはなかった花の包みが置かれているのが見えた。頭上の信号からは「通りゃんせ」の音楽が流れ、和泉自身が通勤通学の歩行者の邪魔になろうとしていた。

「話してもらえない取材はたいへんですよ」と言った山村の言葉通りだった。和泉は、聞き取りは一旦諦めて、駅に隣接したファーストフードで、駅前が見通せるカウンターに座り、コーヒーを飲みながら雪かき男を観察した。

駅前にはタクシーが数台停められる小さなロータリーがあり、最初の細い横道と重なるところに交番がある。そこを越えると商店街となり、左右がアーケード街となっている。さらに真っ直ぐ行くと、信号があり、県道との交差点になっている。その先は住宅街につながっている。交差点からでも駅まではかなりの距離があるのに、雪かき男は交

くされる。降り積もった雪が汚いものや見たくないもので覆い隠してくれるようで、最初は珍しくもありうれしくもあった。しかし、いつしかそれは春が来るまでまったく変化のない白一色の鬱屈した日常へと変わっていった。

和泉は急いで身支度をして、マンションを出た。出社前に駅前で「雪かき男」への取材依頼と簡単なコメント取りだけはしたかった。

「また雪の季節がやってきたねえ」

マンションの管理人が白い息を吐きながら道に通じる階段の雪かきをしていた。軽く会釈して道に出ると、車道は機械で除雪されていたが、歩道はまだ雪に埋まっていた。

通勤には早い時間だった。和泉は滑らないように足の裏に力を入れて車道の脇を歩いた。

駅前通りに出ると、歩道はすでにきれいに除雪され、雪は車道との間にうず高く積まれていた。雪国では歩道も車道も雪のことを考え、幅が広めにとられていた。

駅に真っ直ぐに続く道を見渡すと、県道と交わる交差点のあたりで、雪のよけられた道を竹箒で掃く雪かき男がいた。

和泉は男のそばまで行くと、背負っていたリュックから新聞社のIDカードを取り出して単刀直入に言った。

「あなたを取材させてもらえませんか？」

雪かき男は、和泉に気づくと、和泉の顔を黙ってじっと

差点の先の住宅街のあたりからいつも雪かきをしている。ただ、よく見ると、雪かきをしているのは駅から見て右側

だけだった。同じ歩道でも逆の左側を雪かきしている姿は見たことがなかった。片側だけでも相当な距離であり仕事量だった。

雪かき男は雪かきの仕上げとして、交差点から駅に向かって竹箒で道を掃き進めていた。車道側に立ち、横向きとなりながら、歩行者が来るたびに邪魔にならないように手を止め、通り過ぎると、また雪を掃きながら車道側に寄せていた。頭を下げ、声をかける歩行者もいたが、雪かき男が通行する人と話をしている様子はまったくなかった。

「やっぱり、歩行者の歩く道を確保したいだけみたいですよ」

和泉が出社し報告すると、タイミングが悪かったのか、村上デスクの雷が落ちた。

「本当に彼がそう言ったのか？」

彼は何も言っていない。現実には一言もコメントは取れていなかった。

「表面だけでものごとを捉える記者がどこにいる。もう少し心と身体を動かして取材しろ」

村上デスクは、こと仕事に対しては古いタイプの管理者だった。言い方には問題はあったが、話す内容はいつも正しかった。和泉はその通りだと思って黙って聞いていた。

その様子を見て、隣の後輩の山村がまたマスクの下で笑っているように見えた。確かに、この程度の取材ができないのなら、記者には向いていないのかもしれない。「早くいい人見つけて、そんな寒いところから戻ってきなさい」

母親は電話すると、必ずその話をした。仕事のできない人間が戦場のような職場に長くいてはいけないかもしれない。和泉自身が最近そう感じていた。

すでに入社して五年、本社の政治部に異動になった同期もいた。戦争が起きた国に偶然海外特派員として派遣されていた同期は、毎日のように名前が新聞に載っていた。通常、新卒は五年ぐらいで地方の支局を複数経験し、その後は適性や希望に応じて配置がされる。一つの同じ支局に五年もいるのは同期では和泉ぐらいだった。

和泉は同じ新卒でも内定者の辞退が多数出たことで練り上がって採用された組だった。外国語もできず何の特技もない和泉のことを人事部長は、「吉竹は大学のサークルで手話をやっていたから採用した」といつも言うが、そのことが入社して役に立ったことは一度もなかった。

和泉が手話を勉強しようとしたのは、予備校時代に図書館で受付のアルバイトをしていたことがきっかけだった。週二回、夕方からのシフトだったが、毎回必ず一冊の本を返し、また一冊の本を借りていく凜香ちゃんという中学生

和泉も受付に座りながら手を振った。

その姿を見て、図書館司書の女性が後ろから和泉にささやいた。

「あの子、耳が不自由なのよ」

和泉は何も知らずに声をかけてきた恥ずかしさと気づかずに悪いことをしたという思いから、図書館で手話の本を探し、凜香ちゃんがおもしろかったと言った『星の王子さま』と二冊に借りることにした。和泉が本を借りている間、近くの踏切で人身事故があり電車が遅れているとロビーで利用者が話しているのが聞こえた。

翌日の新聞には、踏切での人身事故で帰宅中の多くの人の足に影響、と記事が出ていた。亡くなった人の名前は凜香ちゃんだった。原因は警察で調査中とのことだった。

凜香ちゃんは死ぬ前に『星の王子さま』を返し、おもしろかったとうなずいた。そして、さようならの手を振った。凜香ちゃんはなぜ死んだのか、事故なのか自殺なのか、自殺であれば何が原因だったのか、和泉は知りたかった。

それから和泉は毎日のように新聞に凜香ちゃんの名前を探した。結局、その後詳しいことは何もわからなかった。和泉はバイト代で手話の本と『星の王子さま』を買った。手話は独学で勉強した。『星の王子さま』はいつも鞆に入れて、凜香ちゃんはどこがおもしろかったのかを考え続けた。子どもの社会問題にも興味をもつようになり、大学は

の女の子がいた。

『不思議の国のアリス』、『絵のない絵本』、『青い鳥』、『スノーグース』、『ガリバー旅行記』、『銀河鉄道の夜』……、凜香ちゃんが借りる本は子ども向けに見えて、内容は大人が読む本が多かった。凜香ちゃんはいつも一人で悲しそうな顔をしていた。和泉は受付として何度か話しかけてみたが、凜香ちゃんは和泉の顔をじっと見るだけで、言葉を返してくれることはなかった。

ある日、凜香ちゃんは本を返すためだけに図書館にやって来た。本を受け取ろうとした時、差し出された右手の袖の奥に火傷と痣のようなものが見えた。凜香ちゃんは本をカウンターに置くと、すぐに手を引っ込め、隠すように左手で袖を握った。返却された本は『星の王子さま』だった。和泉も何度か読んだことのある本だった。

「この本、おもしろかった？」

和泉がいつものように聞くと、凜香ちゃんは黙ってうなずいた。話しかけて反応してくれたのは初めてのことだった。

「新しい本は借りなくてもいいの？」

和泉の言葉に凜香ちゃんは、また黙ってうなずくと、右手の手のひらを前に向けて左右に軽く振った。そんなことは和泉がアルバイトをして一度もなかったことだった。

「さようなら」

社会学部に入り、手話サークルにも入った。新聞社を受けたのもそのことが関係していたのかもしれない。

新聞社に入って、警察や裁判所回りもしたが、公式の発表を完結にまとめるだけで、事件の裏側にあるものは取材できなかつた。いくつか自殺の案件も関わったが、たとえ本人が遺書に残していたとしても、それが真の原因とは限らないと感じることもあった。

凜香ちゃんの踏切事故が発生したら、和泉でも同じように記事を書くだろうし、その後も追うことはなかったと思っただ。そう考えると、取材するのも記事を書くのも何だかむなしくて気持ちが入らなかつた。それは回りにも伝わり、同じ所での経験だけは一番長い支局の何でも屋みたいな役回りになっていた。

結果、与えられたのは雪かき男の取材だった。新聞社に入社して五年、転職するにしても、社内では校正や総務のような仕事を希望するにしても取材記者としては考える時を迎えていた。

これが記者としての最後の取材になるかもしれない。そうならばデスクの言うように、心と身体を動かして、やれることはやってみよう。そう思うと、逆に気持ちが晴れていくのがわかつた。

それから和泉は、毎日会社の行きと帰りに駅前のファーストフードでコーヒを飲みながら雪かき男を待った。冬

の初めは雪の降る日も少なかった。雪かき男が現れると、和泉は必ず話しかけたが、一言もコメントは得られなかった。

雪かき男が現れない日は、雪を待ちながら『星の王子さま』を鞆から取り出して読んだ。

キツネが王子さまに「さようなら」と言った時に教えてくれる秘密——とても簡単なこと。ものごとは心で見なくてはよく見えないの——

凛香ちゃんの最後の顔を思い出しながら、和泉は繰り返して呪文のように唱えていた。

寒さが増し、積もった雪もとけることなく降り重なるようになると、雪かき男は毎日のように駅前通りに現れた。

真っ白な雪の世界で、強い風の日も、寒さで凍てつく日も、和泉は雪かき男に話しかけ続けた。しかし、男はそれに答えることもなく、黙々と歩道の雪かきを繰り返した。

雪が降ると駅前に見れ雪かきをする男と、その男にじっくり話かける女。いつしか、この二人を街の人は、「雪かき男と話しかけ女」と呼ぶようになった。

*

そして、その冬一番の寒気団がやってきた。低気圧の発達とともに、降りしきる雪は夕方には横なぐりの吹雪と

渡すと、和泉しか客はいなかった。

「すみませんでした。すぐにします」

和泉はわずかに残ったコーヒーを飲み干すと、店を出て駅前のコインロッカーと自動販売機のある場所に移動した。そこは屋外の喫煙スペースで屋根は設置されていたが、斜めに吹きつける雪は容赦なく和泉を襲ってきた。会社で貸与された防寒着を着てきたとはいえ、寒さが身体を締めつけていた。和泉はフードをかぶり、ファスナーを顎のあたりまで引き上げ、リュックからスキー用の手袋を取り出し手にはめた。

駅のアナウンスは、後続の上下線はすべて欠行となったことを伝えていた。街灯と信号がぼんやりと光る中、雪かき男が交差点のあたりで雪かきをしている姿がかすかに見えた。雪かき男は何時間続ける気なのだろうか。家に帰らないで夜通し雪かきをするのだろうか。少し休んで、あとでまとめてやったほうがよいのではないか。そんな疑問が和泉の頭をよぎったが、雪かき男はもう二十年も雪をかいている。その間に、こんな日はあったはずだ。和泉がこの街に赴任してからも吹雪の夜はあった。そんな日の翌朝もこの駅前の歩道だけは何の支障もなく歩くことができた。やり続けるしかないのかもしれない。

交差点から聞こえていた信号機の「通りゃんせ」の音楽もいつのまにか消えていた。白い闇の中で、車道の除雪の

なっていた。

支局に残り待機しますと申し出た和泉に、

「雪かき男の取材日和だろう」

村上デスクは、待機の必要はないと手を横に振り、ロッカーから取材用の新聞名の入った防寒着の上下と長靴を渡してくれた。

駅前のロータリーは、通勤通学の家族を迎えに来る車とタクシーを待つ人で慌ただしかった。

雪かき男は、吹きつけてくる雪をまともに受けながら歩道の雪をかき続けていた。雪をかいているそばから雪は降り積もり、交差点から駅まで来る間に、交差点のあたりはもう雪で埋もれていた。やった仕事が減るどころか、振り返ると増えている。地獄で与えられる拷問とはこのような作業を言うのかもしれない。それでも雪かき男は黙々と雪かきをしていた。

夜に向かい、風も強さを増し、視界も悪くなってきた。街灯の放つ光に降りしきる雪が映し出されるだけで、あたりは白い砂嵐のように少し先も見えなくなっていた。駅前には人通りも少なくなり、商店街も早めにシャッターを下ろし始めた。

「申し訳ありません。本日は従業員を早めに帰したいので、あと三十分ほどで閉店させていただきます」

ファーストフードの店員が和泉に謝りにきた。店内を見

ために現れた大型除雪車の警告音だけが聞こえていた。除雪車は車道の雪をよけると、その雪を雪かき男がはねた場所に戻し、歩道にはまた雪が崩れ広がっていた。それでも男は雪をかいていた。

「一人では無理よ」

視界もなくなるような吹雪の中、膝を越え腰の高さまでになっていく雪と一人で格闘する男を和泉は見ているようになった。

和泉は交番に向かった。走ろうとしたが、目も向けられないような雪で思うように進めなかった。雪に逆らって何とか交番に着くと、ドアを叩き、外に立てかけてある除雪道具を指差した。

警官は吹雪の中突然現れた和泉に驚きながらも、意味はわかったようで、外に出てきて軽そうな赤いプラスチックのショベルを貸してくれた。

「交番の回りは私たちが雪をかきます」

「ありがとうございます」

「雪かき男に話しかけていたのは新聞社の人だったのでね」

警官は和泉の防寒着の胸にある新聞名の刺繍を見ている。

「ええ、取材です」

「たいへんですね。ただ、交差点のあたり、車にだけはく

れぐれも気をつけてください」

「わかりました」

和泉はシヨベルを両手で持つと、積もった雪から足を抜いては、また一歩前へと雪かき男へと向かって行った。吹きつける雪は目に入り、マスクにつく雪が吐く息でとけひどく濡れていた。雪をかき分け進む姿は、まるで冬山の遭難救助隊のようだった。

「手伝います」

和泉が雪かき男の前に立って言うと、男はいつものように黙っていたが、シヨベルを持つ和泉を見て、意味は伝わったようだった。そこから二人の雪との闘いは続いた。シヨベルを雪に押し込み、小さな塊をつくり、すくい上げて車道との間に積み上げる。その繰り返しだったが、すぐに腕がきかなくなつた。

雪かき男はそんな和泉を見て、膝を曲げて腰を落とし下半身を使い、と身体の動かし方を身振り手振り以示した。和泉は雪をよけるように手をかざしながら、頭を何度も縦に振り、わかつたと伝えた。和泉は雪かき男とコミュニケーションが取れたことがうれしかった。吹きつける雪で、気を抜けば死ぬのかもしれないと和泉は思ったが、不思議に力はわいてきて、男と一緒に雪をかき続けた。

雪の白さがぼんやりと闇を照らしていた。風の音に混じって、雪かき男の息遣いが聞こえていた。男は時々腰を「ごめんさい。もう会社に行きます」

和泉はカメラをしまおうと、お婆さんを連れて歩く男の前に行き声をかけた。男は右手を顔の前で垂直に立て頭を下げて、和泉の前をお婆さんと一緒に通り過ぎて行った。それは、「ありがとう」という意味だったのだろうが、頭と一緒に垂直に立てた右手を下げたときに、少しだけ左手の甲を叩いたように見えた。

——とても簡単なこと。ものごとは見なくてはよく見えないの——

和泉は心の中でつぶやいた。凜香ちゃんと同じことをまわしていたのかもしれない。和泉は持っていたシヨベルの柄で近くにあった標識のポールを叩いてみた。金属音があたりに響いた。白杖を持ったお婆さんは、背後からの音に驚き後ろを振り返った。しかし、雪かき男は前を見たまま駅に向かつて歩き続けていた。

とても簡単なことだった。雪かき男は寡黙な男などではなく、聴覚に障がいがあり、声が出せなかったのだ。

和泉は、シヨベルを持ち直すと、ロータリーの前にある交番に向かった。警官は交番の回りを雪かきしていた。

「朝までやっていたんですか？」

「ええ」

伸ばすしぐさをするぐらいで休むことなく雪をかいていた。和泉も必死に雪かき男について雪をよけ続けた。寒いはずなのに身体中から汗が吹き出していた。

何時間が過ぎたのだろう。いつのまにか雪はやみ、朝陽が昇ろうとしていた。男は雪をかき続けていた。はねた雪のかげらが空中で光に乱反射し、真っ白な世界の中で男が金色の光に包まれているように見えた。和泉は背負っていたリュックを下ろし、カメラを取り出すと連続でシャッターを切った。

雲の間には、青い空も見え始めていた。始発の時間も近づき、男の雪かきのペースも上がっていた。男の身体から汗が湯気のように立ち上がっていた。和泉も歩道が歩いて通れるようにと速度を上げて雪をはねた。

朝になり、交差点の信号から「通りゃんせ」の音楽が聞こえ始めていた。

しばらくすると、雪をかき男の前に、お婆さんが白い杖をついて立ち止まった。

男はお婆さんに気づくと、ひじのあたりをお婆さんに握らせて、白杖を見ながら歩き出した。地面をなぞるように動く白い杖の先には雪の下にうつすらと見える黄色い点字ブロックがあった。

雪だらけの真っ白な世界に、和泉の瞳にこれまで見えていなかったものが見えたような気がした。和泉はリュック

「でも、あの高田さんは、いつもですからね。本当に頭が下がります」

警官は雪かきの手を止め、駅の入口の階段でお婆さんを見送っている雪かき男を見ていた。

「彼は徹夜でやることもあるのですか？」

「一年に何回かはこういう日もあります」

「また、今度お話を聞かせてください」

和泉は名刺を取り出し、警官に差し出した。

「そういえば、運送会社の伊部さん、新聞社に行きませんか？」

確かに伊部は交番で話を聞いたと言っていた。

「伊部さん、毎年、事故のあった日に交差点に花を手向けていくのですが、高田さんが雪かきをしていたことは知らなかったようで、なぜ、長い間気づかなかったのかと自分をひどく責めていました。そのあと、新聞社に行くと聞いていたので、気になっていたので」

「伊部さんをご存じなのですか？」

「かなり前の話ですが、その交差点の信号を音響式にして押しボタンをつけるために、毎週、一人で交差点に立って署名活動した人です。最初は騒音だと言われ、商店街の人にも反対されたらしいです」

雪かき男とそれを記事にしてほしいと言った伊部は、交差点で結びついていた。

交差点から「通りゃんせ」の音楽が流れていた。今どきのビヨビヨ、カッコーの擬音式ではなかったのも、かなり古くに設置されたことが理由にあったのかもしれない。和泉は支局に帰って、急いで調べなければならないと思った。

「ありがとうございました」

和泉は頭を下げると、借りていたシヨベルを警官に手渡した。

「話しかけ女から雪かき女に変わりましたね。いい記事書いてください」

警官は笑ってそう言うと、シヨベルを交番脇の元の場所に置きに戻った。

和泉は駅に向かった。雪かき男はお婆さんを駅まで送り、また歩道に戻ろうとして、向かってくる和泉に気づいた。

和泉は雪かき男に向かって、右手でこぶしを作って、人差し指と中指を伸ばしながら左に倒した。そして、両手の人差し指を立てて、左右から寄せた。それは、「また、会いましょう！」という意味の手話だった。凜香ちゃんに見せたかった手話だった。

雪かき男は、驚いたように微笑むと、手袋をはずし親指と人差し指でマルをつくり「OK」と合図し作業に戻っていった。

和泉は強ばった足腰で駅の階段を駆け上がり電車に乗っ

「でも、今は少し見えたんだろう」

デスクはマスクをあごにずらし、コーヒーをすすめるように飲んでいった。

「雪かき男は聴覚障がい者でした。そのことに気づけないなんて、私は馬鹿です」

「吉竹、おまえだから気づけたんだよ。それに、これからはおまえの得意な手話で雪かき男の話も聞けるじゃないか」

デスクは和泉の肩をたたいた。

「なぜ、それを知っているのですか？」

和泉はデスクの顔を見上げた。

「人事部長と同期だからな」

デスクの口元は笑っていた。

「駅前の点字ブロックと音響式信号がいつできたかを電話で聞こうと思って」

「吉竹、それは馬鹿だ。うちは新聞社だ。過去を調べるなら、聞く前に記事のデータベースで検索しろ。書庫に行けば縮刷版だってある」

その通りだった。

「そんなことより、まずはコーヒーでも飲んで落ち着け。大事な仕事のときこそ、最初はじっくり、最後は一気に書き抜け」

調べるときは時間をかけて、書くときは思いを込めて一

た。濡れたマスクを新しいものに取り換えようとリュックに手を入れた時、電車の窓に映った顔は、化粧も落ち、髪の毛はね上がっていた。胸元からは汗の匂いもしていた。何より昨日と同じ服だった。何を言われてもいいと和泉は思っていた。

窓の向こうに広がる景色は、もう真っ白ではなかった。和泉にもようやくそこに生きる人のいろいろな生きざまの色が見え始めていた。

*

出勤にはまだ早い時間だった。

和泉は支局に着くと、電話をして話を聞く候補をネットで洗い出した。県庁の福祉課、道路課、そして警察や鉄道会社、和泉には調べたいことがあった。

「おい、徹夜明け、何を真剣にやっている？」

和泉の後ろに、村上デスクがカップを二つ手に立っていた。一つを和泉の前に置くと、モニターを覗き込んだ。コーヒーのおいしそうな香りがした。

「私は何も見えていませんでした」

和泉はカメラのデータを呼び出し、雪かき男と白杖のお婆さんが雪に覆われた点字ブロックの上を歩く写真をデスクに見せた。

気が、デスクの口癖だった。

「ありがとうございます。でも、まだ見えていないことばかりです」

和泉はマスクをずらし、カップに口をつけた。デスクが淹れてくれたのか、和泉が落としたコーヒーよりおいしかった。

「それから、徹夜だったのなら、残業つけておけよ」

「すみません。仕事ではなくボランティアです」

「そうか。仕事は費用対効果だから、いいものが書けるならコストはかけてもいいからな。まあ、書けなくても若い人間は仕事そのものが投資だから」

村上デスクはそう言うと、自分の机に戻っていった。デスクは、ほとんど家に帰らない。そのことで離婚したと噂に聞いたことはあるが、興味をもったこともなかった。今度、時間があつたら聞いてみたいと思った。

和泉はコーヒーを飲みながら、社内データベースにアクセスして、点字ブロックと駅名を入れて検索してみた。

二十年前の夏、県内で初めて駅前に点字ブロックが敷設された時の記事がヒットした。「これで駅まで一人で歩いて行けるようになりました！」という見出しだった。記事を読もうとすると、PCの画面に新着メールの表示がされた。村上デスクからだった。振り返ると、デスクは机に積まれた決裁書類に目を通しながら押印をしていた。

メールを開くと、

「おつかれさま。雪かき男の取材を依頼しに来た伊部さんと駅前交差点を検索しておくこと。以上、頑張れ！」と書かれていた。

和泉は引き出しから、名刺フォルダを取り出し、伊部昭雄の名で検索してみた。点字ブロックが設置された同じ年の冬にあった駅前交差点での交通事故の記事に当たった。付随して音響装置信号機となったのは一年後、どれも二十年前を中心にしたできごとだった。

和泉はそれぞれの日付をメモし書庫に向かった。可動式のラックを動かし、新聞記事の縮刷版を探した。和泉はメモした日付のものを全部両手に抱えて机に戻った。

「おはよう」
後輩の山村が出社していた。

「おはようございます。先輩、朝帰りですか？」

和泉は山村の言葉には答えず、記事を探し、該当のページに付箋を貼り、複合機でコピーをとった。

「あっ！」

和泉はコピーされた記事を斜め見て思わず大きな声を上げた。出社し始めていた他の記者は朝の準備で忙しいのか、和泉の声など気にしていないようだった。

「ごめん、山村君、朝礼の司会お願い。ちょっと出かけてくる」

「いいですけど、先輩、仕事ですか？」

山村は、和泉に急ぎの仕事があるとは思えないという疑いの目で見ていた。

「すみません、取材に行ってきます」

和泉は村上デスクに声をかけた。
「気をつけて行ってこい」

デスクは、他の記者が出かけるときと同じように声をかけてくれた。その言葉を和泉がかげられたのは久しぶりのような気がした。

ビルの外に出て、和泉は空を見上げた。やわらかな雪がまた落ちてきていた。雪かき男はいる。今もまだ雪かきをしているに違いない。

和泉は急いで電車に乗り、コピーしてきた記事を読み込んだ。

県内で初めての点字ブロック完成の記事。その駅が最初に選ばれたのは、当時、近くに盲学校があったからだ。

片側の歩道のみを設置となっていたが、点字ブロックもJIS規格を取り、今後、全国の自治体や公共機関に広がっていくと記事には書かれていた。盲学校の校長の写真と談話、そして、利用者の声として、白杖をついて歩く女性と横で支える男性の写真「これで駅まで一人で歩いて行けます」の女性のコメント、それが記事の見出しにもなっていた。二人の写真の括弧書きの説明には、(お互いに力を合

わせ視聴覚障がいを乗り越えようと秋には結婚予定のお二人)と書かれていた。男性は若く痩せてはいたが、その面影は雪かき男だった。

そして、もう一つの記事。同じ年の冬、駅前の交差点で女性が交通事故死。原因は歩行者側赤信号での女性の雪かぎからの飛び出しと交差点内でのトラックの前方不注意。死因は衝突後の転倒による頭部打撲。当日は十二月の初雪

としては記録的な大雪。女性は妊娠二か月。産婦人科受診後に夫を駅に迎えに行く途中の事故。運転手は業務上過失致死の疑いにて拘留、運行記録をもとに過労の実態がなかったかも運送会社を調査中となっていた。

交通事故の被害者は、半年前の点字ブロックで「これで駅まで一人で歩いて行けます」とコメントしていた女性と同じ名前。姓は雪かき男と同じ高田となっていた。しかし、事故の記事には、どこにも視覚障がいがあることには触れられていなかった。おそらく警察発表通りの記事なのだろう。

事故の加害者は会社員伊部昭雄。雪かき男を記事にしてほしいと支局に頼みにきたのは被害者の命日だったのだ。二十年間、毎年事故のあった日に花を手向けるために事故現場に来ていたのだろう。

事故から二十年、雪かきを続けた男と命日に花をもって事故現場を訪れ続けた男、二人の人生が十二月としては

二十年ぶりの記録的な大雪で再び交錯したのだ。

和泉は目を閉じて、駅前の交差点を思い浮かべた。点字ブロックができ、駅まで歩けるようになったと思っていた妻が、子どもができたことを知らせたくて、駅まで夫を迎えに行った。当時は携帯電話も普及していなかった。その時、その年最初の本格的な雪。黄色い点字ブロックが初めての雪に埋もれていく。妻の白杖はブロックに触れることなく、雪かげから赤信号の交差点に一步踏み出す。そこに目の前の信号が黄色となったのを見て、急いで通過しようとするトラックがアクセルを踏み込む。年末の繁忙期で疲れていた運転手の判断は遅れ、アクセルを踏み込んだ足をブレーキに踏み変えるが、路面の雪が凍結しタイヤは制御をなくす。

電車内に到着を知らせる音楽と駅名のアナウンスが流れていた。

その一年後、同じ交差点の信号が音響式、押しボタン式に変わったことは、事故との関連なしに事実だけ簡単に記事になっていた。

点字ブロックが敷かれただけでは、記事の見出しにある「駅まで一人で歩いて行ける」ようにはなっていない。交差点に音響式の信号が取り付けられて初めて成り立つことだった。機器の開発、行政の対応の順番にも問題はあったのかもしれない。しかし、少なくともきちんと取材



青木ガリアン

あおき がりあん

1961 北海道北見市生まれ
 熊本大学文学部修士課程修了
 物流会社退職 札幌市在住

銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 青木ガリアン

拙い作品を何度も読んでいただいた選考委員の方々には心より感謝申し上げます。

心で見なければ大切なことは見えない。雪に埋もれ隠れてしまったこと、私自身が気づかずになっていた足元の現実、それを心で見なければという思いでこの小説を書きました。賞をいただけたことはとてもうれしく思います。生きていく営みの中で見えにくくなっている大切なものを今後も丁寧に書いていきたいと思えます。今回は本当にありがとうございました。

していれば、その見出しはつけなかったかもしれない。加害者である伊部は、それがわかっていて、音響式交差点設置の署名活動をしたのだろう。

和泉は電車のドアが開くと、走って改札を抜け、駅前のロータリーに出た。交差点の向こうに雪を竹箒で掃く雪かき男の姿があった。真っ白な雪が積もった駅前には、男に向かって一本の黄色い道がのびていた。

「あの人は二十年の間、たった一人で雪をよけてきたのです」

支局の受付で声を大きくした伊部の言葉が脳裏によみがえった。伊部もまた二十年間苦しみ続けてきたのだ。

雪かき男は歩道の雪かきをしていたのではない。点字ブロックの雪をよけていたのだ。駅前には線状の誘導ブロックと丸い突起の警告ブロックが続いている。点字ブロックは凹凸に意味がある。音響式の信号に気づいた伊部も、歩道に雪が積もれば、設置された点字ブロックの凹凸が埋まることに思い至らなかったのだ。

行政は視覚障がい者対策として全国に点字ブロックを普及させた。しかし、雪国ではひとたび雪が降ると、それは意味を失う。特に雪の降り始めは、それまで点字ブロックを使っていた人が急に目印を失うことで、命の綱が断ち切られてしまうことにもなるのだ。

「すべらないようにね」

「だいじょうぶ。おじさんが雪かきしてくれているから」

「いつもありがとうございます」
 やわらかな雪が降る中、雪かき男は小さな子の手を引く女性の足元を竹箒で払ってあげていた。和泉には、それが雪の歩道を幸せそうに歩く三人の親子連れの姿に見えた。和泉はリュックからカメラを取り出し、雪かき男にファインダーを向けた。

「とても簡単なこと。ものごとは心で見なくてはよく見えないの——」

もう二度と会うことのできない、そして、発することのない凛香ちゃんの声が和泉には聞こえたような気がした。まだ見えていないことはあるに違いない。それでも、「雪かき男」の取材を試みたと和泉は心の底から思った。雪の降る季節になると現れ、駅前の歩道を雪かきする「雪かき男」の物語、心で見たことを自分の言葉で記事として伝えたい。

雪どけまでには時間がある。デスクにも紙面を大きくとつてもらおう。

和泉の瞳には、白い雪に真っすぐのびる黄色い道が遠くまでつきりと見えていた。